

### 3-1 ウエペケレ「オンネ ニス」解説

解説：萱野茂

萱野：昭和44年1月23日です。昨日（きのう）に続きまして、貝澤とろしのさんの所へお邪魔しております。

テープ番号2号の一番御終いの方で uepeker [散文説話] の「オンネ ニス」というのがあります。その和訳は、このテープ番号3の所へ入れることになっております。この uepeker [散文説話] の「オンネ ニス」というのが、2号の一番御終い、53分から60分まで入っていますが、それは、ある一人の男が、隣村の知り合いのうちへ行って泊まった。そうすると、家のすぐそばの、アイヌ語では sem [土間] と言うんですけども、その sem の辺りへおばあさんの唸り声が、夜いっぱい聞こえた、と。それで、翌朝早く起きて見ると、そこにはすっかり朽ち果てた臼があった。

そして、それからそのそばで箕（み）もあった、と。いずれも古くなっておったものをそのまま神の国へ帰さずにあった。それらしく思いましたので、家主に話をし、お酒あるいはタバコ、あるいは穀類なんかをあげて神の国へお帰しした。そうすると、晩に立派なおばあさんが夢枕に立って、「あなたのお陰で、私はお土産がたくさん出来たので、神の国へ帰ることが出来ましたよ。本当にありがとうございました。」そのように夢枕に立って、話をしてくれたと。

こうした物語の中でも、アイヌはどんな物でも、手作りのものにも、物には魂が入っておるんだと。そんなことがこう伺われる一つの uepeker [散文説話] であったわけです。

uepeker [散文説話] 「オンネ ニス」の和訳。2号の53分から60分まで入っていたのを今3号テープの最初の方に入れてあります。

それでは、まだ続きまして貝澤とろしのさんに uepeker [散文説話] をしていただきます。